

257. 平成8年度滋賀県下における 発掘調査の紹介(その2)

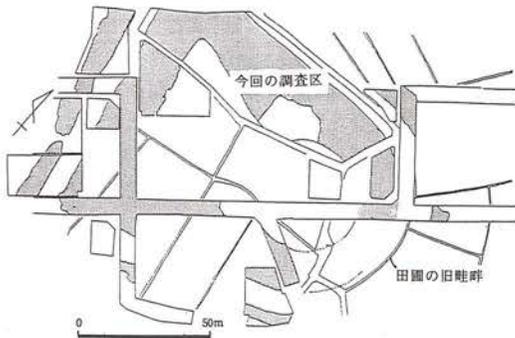
13. 県内有数の大型前方後円墳を発見

野洲町小篠原 小篠原遺跡

調査地は、野洲町小篠原の旧中山道を北へ入った。新幹線沿いの水田地帯に位置する。この周辺は、4年前に区画整理が計画され、それに伴い発掘調査が実施されてきた。今回の調査は宅地造成に先立つもので約3,000㎡に及んだ。

調査の結果、削平をうけた前方後円墳の基底部分と周濠の一部を検出し、円筒埴輪・形象埴輪・盾形や笠形の木製埴輪等の遺物が出土した。円筒埴輪は、川西編年のⅣ期後半に相当し、時期は5世紀後半にあたるものと思われる。

調査開始当初においては、南の隣接地から続く大溝の検出が予想されたが、調査が進行するにつれ、大溝が古墳の周濠であることが判明した。周濠からは、埴輪片とともに墳丘から崩落したと思われる葺石が多量に認められた。また、底には植物遺体層が広範に堆積しており、その中の自然木溜りから木製埴輪が出土した。更に、周濠の外側には、周濠に沿う形で大溝が巡っており、馬形埴輪・人物埴輪等が出土している。この古墳の規模を周濠の推定線から計算すると、墳丘長が約90m、全長が約120mになり、県内でも有数の大型前方後円墳となる。



遺構平面図

今回の調査地は、小字名を林ノ腰といい、付近にある「林殿墳」の石碑、近隣で出土した「林」の墨書土器等から、「林」の字がこの古墳の伝承において重要な役割を担うものと思われる。

この前方後円墳の発見により、大岩山古墳群の首長墓系列に大幅な見直しを余儀なくされたことになり、この古墳をどのように位置付けるかが、今後の課題といえよう。

(野洲町教育委員会 福永 清治)

14. 野洲川高水敷における建物基壇の調査

中主町堤 堤遺跡

堤遺跡は、全体的に北北西に流れた旧野洲川北流がくの字に湾曲し、広く高水敷(中敷堤防)を形成した箇所を含め、現堤集落を中心とした中世から近世に至る複合遺跡である。平成4年度の第1次調査では、旧野洲川北流の一部が15世紀頃に灌漑を目的として築堤された人工河川であったことや、大規模な地震による液状化跡等が確認されている。第2次調査となる今回は、旧野洲川北流旧左岸堤防西(守山市)側にあたる。

調査の結果、旧河道や液状化跡の他、寺社に係ると思われる方形基壇跡や墓坑等、高水敷下に埋もれた中世期の貴重な資料が得られた。確認された遺構面は大別して3面であり、第2面については3期以上に細別される。以下、第2面以降より概略を記す。

第2面は方形基壇が確認される。まず、版築基壇が築かれる。その規模は、掘込地業の平面プランと壁面観察により、南北辺約9m、東西辺不明、高さ約0.7mを測る。時期的には15世紀代を考えている。これは、おそらく洪水に見舞われ、基壇上建造物等被害を被り、一回り大きくした石積基壇として再築される。この際、石積基壇は版築基壇の一部を破壊して設けられる。その規模は、南北辺約11m、東西辺不明、高さは最も良好に遺存しているところで約1.1mを測る。石積は、角部や基部にやや大きめの自然石を配するものの、全体的には長径約20cm前後の自然石を積み上げている。石材は、湖東流紋岩と思われる。築造時期については、15世紀末から16世紀初頭と考えている。これらの版築及び石積基壇周辺部の状況については、調査期間の問題により面的な調査を行えていないが、足跡が基壇北東方向にやや離れた箇所を確認されていることから、

周辺には水田が広がっていたことが予想される。この石積基壇もまた、短期間の存続の後洪水を被り、建造物は流され基壇自体も埋没していく。

第1面では、埋没した石積基壇上に、コの字に素掘溝を巡らす区画が見られる。この方形区画帯の規模は、南北辺約15.5mを測り、東西辺及び盛土高は不明である。おそらく、第2面検出基壇に後出する溝に囲まれる土壇状のマウンドであると思われる。土壇の南東方向には墓坑4基、不明遺構2基が検出されており、土壇南東域は基域化していったことがうかがえる。时期的には16世紀代を考えている。

以上、非常に短期間の間に推移した版築・石積基壇、溝に区画される土壇であるが、壇上にはそれぞれ瓦葺の建造物の存在が予想される。しかし、それらが寺院又は神社の何れに属するものなのか、また、どれくらいの規模を有するものであるのかは、史料等全く見られないため不明である。ただ、第1面で周辺地が墓域化していく事実は、これらの遺構が当地で営まれ続けた意味を大きく示唆しているのかもしれない。

(中主町教育委員会 河合 順之)

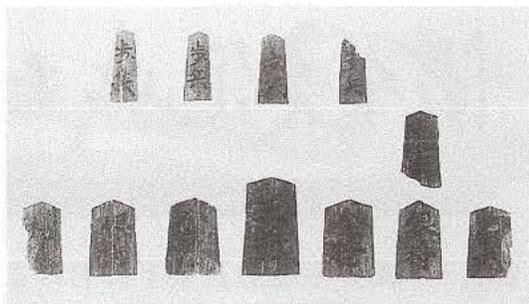


石積基壇全景

15. 安土町観音寺城下町遺跡の調査
安土町石寺 観音寺城下町遺跡

観音寺城下町遺跡は蒲生郡安土町石寺地先、南近江守護であった六角氏の居城である観音寺城の南麓に位置し、古墳時代から戦国時代にかけての複合遺跡であることが周知されている。中でも戦国時代の遺構・遺物は観音寺城の城下町に伴うものとして注目される。

今回の調査でも戦国時代(16世紀後半)の石組溝・素掘溝・井戸・土坑などを検出した。石組溝は3条検出し、最も石寺集落に近い溝からは土師皿が一括して投棄された状況で多量に出土した。またそれに混在するように木製品(鋤・杵)・金属器(鉄製刀予・銅製鞘)・鉄滓・炉壁片が出土した。素掘溝は数条検出し、瓦が多量に出土した溝と、土師皿・瀬戸美濃陶器類が多量に出土した溝がある。井戸は円形の素掘りのものを1



基検出し、下駄・漆器椀・漆器皿・盤・木製椀末製品・ザル・瀬戸美濃皿が出土した。土坑で特筆すべきものは鉄滓と炉壁が多量に出土したものと、将棋駒が出土したものである。出土将棋駒は王将1枚・飛車1枚・金将3枚・銀将2枚・桂馬2枚・歩兵4枚の計13枚で、字はすべて墨書で漆書や彫り駒はない。駒頭から駒尻までの厚さが2~3mmと均一に薄いことが特徴で、ほぼ同時期の福井県一乗谷朝倉氏館遺跡出土のいわゆる朝倉駒に酷似している。将棋駒は一度に多数出土することは稀で、戦国時代の出土例では一乗谷朝倉氏館遺跡の174枚に次ぐものである。

今回は幅1mのトレンチを総延長1.5kmにわたって調査したため、遺構の性格など不明な点は多いが、城下町遺構の広がりがおおむね把握できたことや、鉄滓・炉壁・木器末製品など城下での手工業生産を示すものが出土したことが、大きな成果であるといえる。

(助滋賀県文化財保護協会 岩橋 隆浩)

16. 金箔 瓦が出土

蒲生郡安土町・神崎郡能登川町 特別史跡安土城跡

特別史跡安土城跡の実態をより広く解明するために平成8年度は、城内主要路確認調査の搦手道と城内主要遺構確認調査の主郭東面を対象地として発掘調査を実施した。いずれの調査も、遺構の有無と残存状況の把握を目的とし、搦手道についてはルートと構造の解明も目的とした。

まず、搦手道の調査では、幅約2.5~3mを測り、明瞭な踊り場を持ち、屈曲・分岐を多用する道であることを確認した。道幅約6mを測り、屈曲部では扇状に踏石列を展開させる大手道とは規模・構造共に大きく異なっている。井戸は、南北7.5m×東西6.8mと南北5.5m×東西3.3mの2重の石垣で方形に囲まれており、そのほぼ中央に井戸枠があると想定される。井戸枠に面して敷石があり、水汲み場と考えられる。規模的には、豊臣秀吉が小田原攻めの際に築城した石垣山一夜城の井戸郭の約1/4であるが、構造は極めて近似している。

主郭東面では、特に伝堀跡南郭の虎口において櫓

門とこれに連続する^{つづきやぐら}続櫓の礎石を検出し、伝米蔵跡・伝煙硝蔵跡内と共に後世の擾乱を受けていないことが明らかになった。主郭外周路では、通路途中に設けた門とこれに伴う武者溜まりを確認し、城内における防衛システムの1例が明らかになった。

今回の調査では、以上の様に各遺構が極めて良い状態で残存していることが判明したが、大量に出土した瓦類からも多くの成果を得ることができた。伝米蔵跡虎口近辺から出土した金箔鯨瓦片は、三の丸から主郭炎上後間もなく投棄されたものであり、三の丸内の建物に葺かれていたと判断される。これによって、安土城において鯨が使用されていることが確認された。また、伝煙硝蔵跡では、この投棄瓦層の下から種類・規格毎に10枚づつ積み上げられた5列の瓦を検出した。建築用・補修用あるいは火事場整理時に使用可能なものを集積したものであると考えられ、施設内の空間利用の具体例を示すものとして意義深い遺構である。

(安土城郭調査研究所 小竹森直子)



安土城跡集積瓦の検出状況

17. 白鳳期の寺院跡の調査

能登川町佐野 町史跡法堂寺遺跡

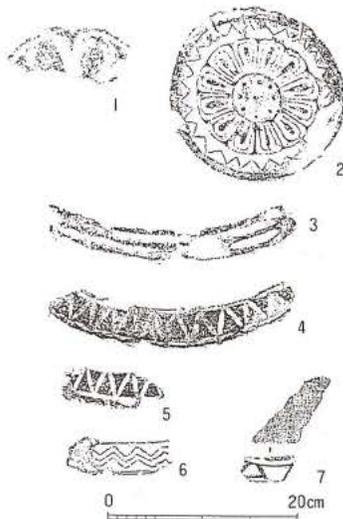
法堂寺遺跡(廃寺)はJR能登川駅より東方約700m地点の住宅街に位置している。塔心礎(高さ1.5m)が現存し、古くから瓦や土器が採取されており、また、周辺に残る神崎郡条里の地割りと異なる正方方位の地割りをしていることから、白鳳時代の法隆寺式の伽藍配置をした寺院跡と推定され、昭和47年に町の史跡に指定された(指定面積14,816㎡)。

指定地内での発掘調査は過去に実施されたことが無く、昭和49年に指定地の西隣りを県教委が調査したのみであった。平成6・7年度に町史跡指定地を対象に町教委が遺跡範囲確認調査を実施し、寺域を区画する溝や瓦溜まり等の遺構が検出され、法隆寺式の伽藍配置をとらないことが判明した。

平成8年度は遺跡公園の整備を前提として、塔心礎

の北方の地区、約900㎡の調査を実施し、掘立柱建物跡、溝、瓦溜まり、自然河道等の遺構が検出され、遺物は軒瓦などの瓦類や鷗尾片、土器類などが多数出土した。

検出した5棟の掘立柱建物や溝はいずれも正方方位をとっており、僧坊的な建物が想定される。



法堂寺廃寺出土軒瓦

出土した軒丸瓦は単弁蓮華文軒丸瓦(1)、複弁蓮華文軒丸瓦、外向鋸歯文縁軒丸瓦、細弁12弁線鋸歯文縁軒丸瓦(2)が、軒平瓦は三重弧文軒平瓦(3)、鋸歯文軒平瓦(4・5)、波状文?軒平瓦(6)、軒平瓦?(7)が出土している。しかし、これらの軒瓦類は、当地方に多い湖東式といわれる渡来人の影響を受けたものや、中央の技術を直接受け入れたものでなく、非常に地方色の濃い特異なものである。

鷗尾は、近江地方に多くみられる断面方形の突帯を施しており、胴部と鱗部は段をつけて表現している。

平成9年度は伽藍配置を確認するために面的な調査を実施する予定であり、それによって法堂寺廃寺の全容が明らかになることと思われる。

(能登川町教育委員会 杉浦 隆支)

18. 呪符木簡出土

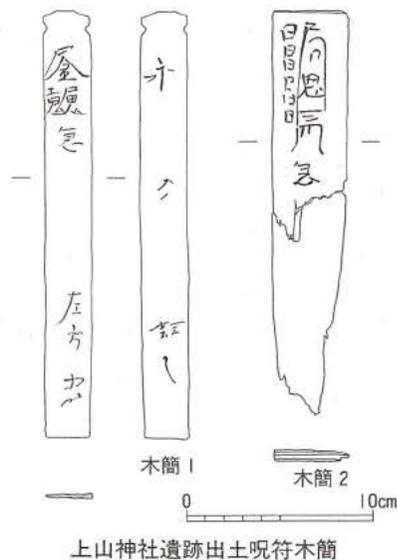
能登川町山路 上山神社遺跡

上山神社遺跡は能登川町のほぼ中央部にあたる大字山路の上山神社周辺に位置している。平成9年秋に開館する予定の能登川町総合文化情報センター(図書館・博物館・能登川町埋蔵文化財センター)の建設に伴い平成7年春に道路部分の調査(約1,500㎡、「滋賀文化財だより」№219号)を実施している。

今回の調査は、能登川町総合文化情報センター建設事業に伴う建物部分(約200㎡)の追加調査である。調査の結果、平安時代末から鎌倉時代の土坑が検出され、黒色土器の椀や土師皿多数のほか呪符木簡2点と刀形?木製品1点、容器の底板1点等が出土した。

木簡1は長さ23cm、幅2.5cm、厚さ0.3cmを測り、頭部が圭頭状に削りだされ、その下に紐を結ぶための切り欠きが施されており、下端は水平である。墨書は両

面に認められ、表面の上半部には呪いの文字があり、その下に「急□」と見え、おそらくその下に「急々如律令」と書かれていたものと思われる。下半部には「左方□」と読みとれるが、意味は不明である。裏面には上端・中央・下端に文字が1〜2文字確認できるが、判読不明である。



上山神社遺跡出土呪符木筒

木筒2は長さ21.7cm以上、幅4.1cm、厚さ0.6cmを測り、頭部が平らに削りだされ、下端は欠損しており、おそらく地面に突き刺していたものと考えられる。墨書は片面のみに認められ、表面の上半部には呪いの文字があり、その下に「急□」と見え、おそらく木筒1と同様に、その下に「急々如律令」と書かれていたものと思われる。

刀形？木製品は、長さ64cm、幅7cmの実用的な大きさである。表面には細かい傷があり、一部焼き焦げた部分もある。

これらの遺物が出土した土坑またはその周辺で祭祀的なことがおこなわれたことが想定される。

(能登川町教育委員会 杉浦 隆支)

19. 長浜城下町期の町家跡を検出
長浜市元浜町 長浜町遺跡

長浜町遺跡は、中世から現代に至る複合遺跡である。民間開発に伴い約650㎡を調査した。調査地は、城下町時代のメインストリートの一つ本町筋（現駅前通り）と北国街道が交差する南西角地で、長浜町の実力者の一人、長浜三年寄を務めた下村藤右衛門の屋敷があったところである。しかし、下村家の記録は未発見で、家の間取りも職業も不明である。今回の調査の結果、4面の遺構面が確認され、町家遺構を検出した。

検出された第1〜3遺構面は、大正時代の破壊を著しく受けていたが、第4遺構面では、町家の側柱等の礎石列・井戸・裏口（勝手口）等が検出された。この第4遺構面で最も注目すべきことは、間口が本町筋（北）を向いていることと、宅地割りが確認されたこ



第4遺構面の礎石列

とから町家が1軒ではなく数軒存在していたことである。1647（正保4）年の絵図によると、調査地は、すでに下村家1軒となっており、間口も街道（東）を向いている。これにより、第4遺構面で検出された遺構がそれ以前の状況を示していることが明らかとなった。また、第4遺構面より下には遺構・整地面が存在しないこと、礎石を抜いた痕跡が確認できないことなどから、検出された遺構は、城下町の初期の状態をとどめていると思われる。

検出された町家の規模は、最小で間口4軒、奥行9軒である。特に角地の町家は、かなり大きく初期下村家の屋敷跡ではないだろうか。側柱の礎石列は、近接しており、町家と町家の間隔は20cm程であったと考えられ、かなり密接して町家が建てられていたと考えられる。

今回の調査は、羽柴秀吉による城下町整備の状況、下村家の歴史、そして現代に至るまでの長浜町の変遷を解明する重要な資料となった。

(長浜市教育委員会 丸山 雄二)